

名古屋大学農学部における海外研修

－その実践と課題－

川 北 一 人

＜要 旨＞

名古屋大学農学部は学部選択必修科目の一つとして、2008年にカンボジアでの「海外実地研修」を開始した。現在では実施形態を見直し、タイ、カンボジア、日本の3カ国における海外学生交換プログラムとして「海外実地研修」と「海外学生受入研修」を実施している。参加対象はタイのカセサート大学、カンボジア王立農業大学、名古屋大学農学部の学部学生（主として3年生）である。本研修の目的は、農業現場に対する広いバックグラウンドと国際的な視野を持って行動し、社会に貢献できる人材育成のため、学部学生に現代世界における農業の問題点を深く感じさせることである。そのために、東南アジアにおける発展途上国であるカンボジアと農業先進国であるタイ、及び先端農業を展開する日本における研修を通してそれぞれの農業事情を理解することを求めている。学生は相手国学生と主体的なグループ学習を行い、政府機関、農村、企業、マーケットなどでの調査・インタビューにより農業生産の実相を学ぶ。本稿では、研修の状況と継続的实施に向けて検討すべき諸課題について紹介する。

1. はじめに

名古屋大学農学部は、その教育理念の中に、「世界、とりわけアジア諸国との学術および教育の交流を通して、『生命農学』と農業・生物産業の道を拓く人材を養成する。」ことを掲げている。本農学部では、平成18年度に3学科（生物環境科学科、資源生物科学科、応用生命科学科）体制への改編を行うにあたり、この目標を達成するための教育プログラムおよびカリキュラムを構築することを目指した。

名古屋大学大学院生命農学研究科・教授

その一つとして、現場での実地体験研修を通して農学を学ぶことが重要であるとの観点から、資源生物科学科では「国内実地研修」と「海外実地研修」を、3、4年次を対象とした選択必修科目として平成20年度から実施することを計画した。「国内実地研修」では、研修先を愛知県下で選択することとし、最先端農業技術の開発現場である愛知県農業総合試験場、農業技術の指導や資材の提供あるいは流通の現場としてのJAあいち経済連（愛知県経済農業協同組合連合会）、国の農業政策の実施機関である東海農政局、あるいはわが国の農業現場の課題を抱えた愛知県北設楽郡東栄町農家において、関係諸氏の協力を得て短期インターンシップを行うこととした。

一方、「海外実地研修」では、東南アジアの1カ国（カンボジアなど）に数人の学生を隔年で派遣することを当初想定した。しかし、6年を経過した現在、タイ国カセサート大学（KU）およびカンボジア王立農業大学（RUA）との大学間学術交流協定に基づき、「海外実地研修」（現地への派遣）と「海外学生受入研修」（海外からの受け入れ）を対になった双方向交換プログラムの一環として位置づけ、両科目を当初予想を上回る規模（参加人数、体制、効果）で実施している。本稿では、体験型学習の実践例として、研修の目的、6年間の実施状況、その間に検討した事項、今後の課題について紹介させて頂く。

2. 研修の目的

本研修の目的は、農業現場に対する広いバックグラウンドと国際的な視野を持って行動し、社会に貢献できる人材育成のため、学部3年生の若い頭脳に対して現代世界における農業の問題点を深く感じさせることにある。本学農学部、特に資源生物科学科では、講義、実験実習、あるいは農場におけるフィールド実習を通して、食料生産に関する熱意を養うことを教育目的の一つとしている。これら大学内での講義・実習を補完するために、日本で行われている最先端農業と東南アジアにおける先端あるいは発展途上の農業を現地で実際に体験する機会を与える科目として本研修を企画した。

本研修の特徴は以下ようになる。

- 1) タイ・カンボジア・日本3カ国の合同研修：タイ・カセサート大学（KU）学生、カンボジア王立農業大学（RUA）学生、名古屋大学農学部学生

を対象とする。

- 2) グループワークの実施：学生の主体的研修とするために、名古屋大学学生3名に加え、KUまたはRUA3名で1グループを編成する。
- 3) 研修の実施方法：農村地域での農業生産の実相を学ぶため、聞き取り調査と観察を併用する。
- 4) テーマの設定：グループごとにコメ生産、畜産、食品、灌漑・水管理などのテーマを設定する。
- 5) 成果発表：グループごとに英語で成果発表を行う。
- 6) 各大学での単位認定：事前研修、現地研修、事後研修、レポートを総合的に判断して「海外実地研修」と「海外学生受入研修」それぞれについて各大学が単位認定を行う。
- 7) ティーチングアシスタント（TA）の参加：3年次に参加経験のある大学院生から選抜してTAとして研修に参加させる。

3. 研修の実施状況

平成20年度から25年度に実施した海外研修（「海外実地研修」と「海外学生受入研修」）の概要は以下の通りである（表1参照）。「海外学生受入研修」は、タイ国カセサート大学（KU）およびカンボジア王立農業大学（RUA）との大学間学術交流協定に基づき、「海外実地研修」と対になった双方向交換プログラムの一環として位置づけられている。

表1 農学部「海外実地研修」「海外学生受入研修」実施状況

		海外学生受入研修		海外実地研修（派遣）			
平成 20年度 2008	受入期間		/	派遣期間	2009年1月19日～ 1月25日（7日間）		
	受入国・大学			派遣国・大学	カンボジア・RUA		
		学部学生		RUA	学部学生	3年生5名	
		教職員			教職員		
	名古屋 大学	学部学生		名古屋 大学	学部学生	3年生5名	
		大学院学生			大学院学生	-----	
	教職員		教職員	6名			

平成 21年度 2009	受入期間		/	派遣期間		2009年11月19日～ 11月26日(8日間)	
	受入国・大学			派遣国・大学		カンボジア・RUA	
		学部学生		名古屋 大学	RUA	学部学生	3年生10名
		教職員				教職員	
	名古屋 大学	学部学生		大学院学生	名古屋 大学	学部学生	3年生11名
		教職員				大学院学生	-----
教職員		教職員		6名			
平成 22年度 2010	受入期間		/	派遣期間		2010年11月25日～12月5日 (11日間)	
	受入国・大学			派遣国・大学		タイ：KU、カンボジア：RUA	
	KU	学部学生		名古屋 大学	KU	学部学生	2～4年生6名
		教職員				教職員	
	RUA	学部学生		大学院学生	RUA	学部学生	3年生21名
		教職員				教職員	
名古屋 大学	学部学生	大学院学生	名古屋 大学	学部学生	3年生21名		
教職員		教職員		大学院学生	TA 2名		
教職員				教職員	8名		
平成 23年度 2011	受入期間		2011年10月24日 ～11月2日 (10日間)	派遣期間		2011年11月24日～12月4日 (11日間)	
	受入国・大学		タイ：KU	派遣国・大学		タイ：KU、カンボジア：RUA	
	KU	学部学生	2～4年生15名	テーマ 別グル ープ	KU	学部学生	2～4年生13名
		教職員	3名			教職員	11名
	RUA	学部学生			RUA	学部学生	3年生24名
		教職員				教職員	
名古屋 大学	学部学生	19名(3年生4 名、4年生15名)	名古屋 大学	学部学生	36名(3年生24 名、4年生12名)		
	大学院学生	TA 18名		大学院学生	TA 6名		
教職員		16名		教職員	11名		

名古屋大学農学部における海外研修

平成 24年度 2012	受入期間	2013年3月16日 ～3月25日 (10日間)	派遣 期間	2012年11月20日～12月2日 (13日間)		
	受入国	タイ：KU、 カンボジア：RUA	派遣国	タイ：KU、カンボジア：RUA		
	テーマ別グループ	4テーマ (コメ生産、畜産、 先端農業、灌漑)	テーマ 別グル ープ	5テーマ (コメ生産、畜産、食品加工、 灌漑など)		
	KU	学部学生	2～5年生 20名	KU	学部学生	2～5年生 30名
		教職員	2名		教職員	10名
	RUA	学部学生	3、4年生 4名	RUA	学部学生	3年生 29名
		教職員	4名		教職員	10名
名古屋 大学	学部学生	3年生 21名	名古屋 大学	学部学生	3年生 29名	
	大学院学生	TA 15名		大学院学生	11名 (TA 10名、 ALP 1名)	
	教職員	18名		教職員	8名	
平成 25年度 2013	受入期間	2013年10月17日 ～10月25日 (9日間)	派遣 期間	2013年11月20日～12月1日 (12日間)		
	受入国	タイ：KU、 カンボジア：RUA	派遣国	タイ：KU、カンボジア：RUA		
	テーマ別グループ	3カ国共通5テーマ (コメ生産、園 芸、畜産、食品加 工、灌漑)	テーマ 別グル ープ	3カ国共通5テーマ(コメ生産、 園芸、畜産、食品加工、灌漑)		
	KU	学部学生	2～5年生 20名	KU	学部学生	2～5年生 20名
		教職員	3名		教職員	10名
	RUA	学部学生	3、4年生 8名	RUA	学部学生	3年生 31名
		教職員	2名		教職員	10名
名古屋 大学	学部学生	3年生 26名	名古屋 大学	学部学生	3年生 27名	
	大学院学生	TA 12名		大学院学生	TA 7名	
	教職員	18名		教職員	7名	

KU：カセサート大学（農学部・獣医学部・工学部（農業工学）・教育学部（農学関連）
・教養学部）

RUA：カンボジア王立農業大学

3.1 平成 20 年度研修

「海外実地研修」の初年度実施にあたり、訪問地をカンボジアに設定した。名古屋大学大学院生命農学研究科とカンボジア王立農業大学（RUA）との間で、2008年に学術交流協定を締結していること、また名古屋大学農学国際教育協力研究センターとRUAとの間で、教育システム確立のための協力・共同研究や、農産物加工品の開発・品質向上の実践を通しての交流実績があることなどを踏まえた選択であった。3年生5名と教職員6名が参加し、2009年1月19日（月）～1月25日（日）（7日間）に実施した。

3.2 平成 21 年度研修

20年度の試行を受けて本格的に研修を開始し、3年生11名と教職員6名が参加して2009年11月19日（木）～11月26日（木）（8日間）に実施した。21年度からはカンボジアの主要作物であるイネの収穫時期に合わせた期間を設定したことにより、現地での農業生産の実情を視察することができた。RUA学生10名とともに両国学生が混在する5グループを編成して、グループごとに計画立案、タケオ州の農村地域での聞き取り調査と観察、RUAでの成果発表を行った。

3.3 平成 22 年度研修

2010年11月25日（木）～12月5日（日）（11日間）に、3年生20名、4年生1名、ティーチングアシスタント（TA、大学院生）2名、教職員8名が参加して実施した。また、カンボジアでの研修に先立ち、南アジアにおける農業先進国であるタイでの研修を試行した。タイの相手校として、大学間学術協定校であるカセサート大学（KU）を設定した。

3.4 平成 23 年度研修

2011年11月24日（木）～12月4日（日）（11日間）に、3年生24名、4年生12名、TA6名、教職員11名が参加してタイとカンボジアの両国で実地研修を実施した。23年度は日本学生支援機構の「留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）プログラム」に採択され、参加学生が財政的支援を得られたこと、本研修を教員FDの一環として位置づけ、若手教員の参加を促したことが参加者増加の要因であった。

また、「海外学生受入研修」を「海外実地研修」と対になった双方向交換プログラムとして位置づけ、2011年10月24日～11月2日（10日間）に

KUの農学関連4学部学生15名を対象に愛知県下の農家やJA機関での現地研修を実施した。

3.5 平成24年度研修

「海外実地研修」では、3年生29名とタイでKU学生30名、カンボジアでRUA学生29名がそれぞれ参加して2012年11月20日（火）～12月2日（日）（13日間）に実施した。事前研修（すべて英語で実施、計5回）（2単位認定）では学生が相手国学生と連絡を取りながら自主的に計画立案を行った。現地研修（1単位認定）において、5つのテーマ別に講義、農家滞在、農村調査、市場見学などのグループ研修を行い、農産物の生産と流通について現地学生と共同でまとめた結果を英語で発表した。また、カンボジアでの研修期間中には濱口総長の視察もあった。

「海外学生受入研修」では、2013年3月16日（土）～3月25日（月）（11日間）にKU、RUA両大学から学部生（KUの農学関連5学部から20名、RUAから4名）を受け入れ、名古屋大学農学部3年生とともに研修を実施した。4テーマ（コメ生産、畜産、先端農業、灌漑・水管理）8グループに分け、愛知県下でそれぞれ2泊3日の現地研修を行い、成果を英語で発表して単位認定がなされた。

3.6 平成25年度研修

平成25年度は「海外実地研修」に先行して「海外学生受入研修」を実施した。2013年10月17日（木）～10月25日（金）（9日間）に両大学から学部3年生（KUの農学関連5学部から20名、RUAから8名）を受け入れ、名古屋大学農学部3年生（26名）とともに研修を実施した（表2）。今回の研修では、名古屋大学とKUの学生には、「海外実地研修」と「海外学生受入研修」をともに履修することを促した。そこで、日本での「海外学生受入研修」とタイ・カンボジアでの「海外実地研修」を通して3カ国共通のテーマ（コメ生産、園芸、畜産、食品加工、灌漑・水管理）を設定し、名古屋大学とKUの学生は同一テーマを選択することを課した。3カ国の学生を5テーマ10グループ（1グループ5～6名）に分け、愛知県下で2泊3日の現地研修と成果発表を行い、各大学により単位認定がなされた。

「海外実地研修」は2013年11月20日（水）～12月1日（日）（12日間）にタイとカンボジアで実施し、名古屋大学3年生27名、KU学生20名、RUA学生31名が参加した（表3）。事前研修、現地研修、成果発表に対し、

各大学により単位認定がなされた。受入研修が事前にあったことにより、3大学のグループメンバーの交流が円滑になされており、現地でのコミュニケーションも研修開始時から活発になされた。

表2 平成25年度農学部「海外学生受入研修」日程概要

月日	スケジュール	宿泊先
2013年 10月16日(水)	【RUA】 20:25 プノンペン発 TG585 便 21:30 バンコク着	
10月17日(木)	【RUA】 0:05 バンコク発 TG644 便 8:00 中部国際空港着 [P.M.] 学内ツアー 【KU】 8:15 バンコク発 TG646 便 16:10 中部国際空港着	名古屋大学 宿泊施設
18日(金)	研究室実習	同上
19日(土)	9:30 名古屋大学教員による講義(12講) [P.M.] 計画立案 (G.W.)	同上
20日(日)	自由行動 (各グループで)	同上
21日(月)	グループでの現地調査 (5テーマ、2班ずつ)	現地宿泊
22日(火)	グループでの現地調査	現地宿泊
23日(水)	グループでの現地調査 [P.M.] 発表準備 (G.W.)	名古屋大学 宿泊施設
24日(木)	9:30 成果発表 (シンポジオン会議室) 18:00 懇親会 (レストラン花の木)	同上
25日(金)	11:00 中部国際空港発 TG645 便 15:00 バンコク着 【RUA】 18:15 バンコク発 TG584 便 19:25 プノンペン着	

KU：カセサート大学

RUA：カンボジア王立農業大学

表3 平成25年度農学部「海外実地研修」日程概要

月日	スケジュール	宿泊先
2013年 11月20日(水)	8:30 中部国際空港に集合 11:00 名古屋発 TG645 便 (6時間45分) 15:45 バンコク着 KU-KPS キャンパスへ移動 (バス)	KU International House
21日(木)	KU 教員による講義とキャンパス見学 計画立案 (G.W.) 歓迎会	同上
22日(金)	[A.M.] 5方面に分かれて移動 (マイクロバス) 現地調査 (G.W.) [P.M.] インタビューなど (G.W.)	現地ホテル 5方面分宿
23日(土)	[A.M.] インタビューなど (G.W.) [P.M.] KU-KPS キャンパスへ移動 (マイクロバス) 発表準備 (G.W.)	KU International House
24日(日)	成果発表	同上
25日(月)	[A.M.] 市内見学 [P.M.] バンコクへ移動 (バス) 18:25 バンコク発 TG584 便 (1時間15分) 19:40 プノンペン着	Mittapheap Hotel Phnom Penh
26日(火)	[A.M.] プノンペン中央市場見学 (G.W.) [P.M.] RUA へ移動 (バス) RUA 教員による講義 計画立案 (G.W.)	同上
27日(水)	[A.M.] 5方面に分かれて移動 (マイクロバス) 現地調査 (G.W.) [P.M.] インタビューなど (G.W.)	現地ホテル
28日(木)	[A.M.] インタビューなど (G.W.) [P.M.] プノンペンへ移動 (マイクロバス) ホテルで発表準備 (RUA 学生と同宿) (G.W.)	Mittapheap Hotel Phnom Penh
29日(金)	成果発表 懇親会	同上
30日(土)	Killing field などの見学 20:40 プノンペン発 TG585 便 21:45 バンコク着	
12月1日(日)	0:05 バンコク発 TG644 便 (5時間25分) 7:30 名古屋着 中部国際空港で解散	機中泊

KU：カセサート大学

RUA：カンボジア王立農業大学

4. 現在の実施形態に至るまでに検討した事項

4.1 事前研修

海外研修の事前研修では、訪問国であるタイとカンボジア及び自国日本の農業について基礎知識を得ておくことを課している。名古屋大学学生はグループごとにテーマを選択し、調べた結果を英語で発表する。平成 25 年度の場合、大部分の学生が「海外実地研修」と「海外学生受入研修」の両方に参加し、グループメンバーを固定して一貫したテーマで3カ国での現地研修を行う5テーマ10グループ編成とした。そこで、事前研修では次の20項目について、各グループが2項目を担当し、TAの支援の元で準備した成果を発表した。英語での発表と討論は、現地研修に向けて予行の意味を持ち、また各事項で使われる用語の英語表記を整理する上で有効であった。

日本におけるコメ生産

日本における園芸

日本における畜産

日本における食品加工

日本における灌漑・水管理

日本における第三次産業

日本の政治・経済

日本の歴史

日本の文化

日本の自然環境

タイ・カンボジアにおけるコメ生産

タイ・カンボジアにおける園芸

タイ・カンボジアにおける畜産

タイ・カンボジアにおける食品加工

タイ・カンボジアにおける灌漑・水管理

タイ・カンボジアにおける第三次産業

タイ・カンボジアの政治・経済

タイ・カンボジアの歴史

タイ・カンボジアの文化

タイ・カンボジアの自然環境

4.2 事前・事後アンケート

海外実地研修の参加学生全員に対し、事前と事後のアンケートを実施している。事前アンケートは参加が決定した時期（事前研修開始前で海外実地研修の約4ヶ月前）に行い、事後アンケートは帰国直後に行っている。調査項目は以下の通りであり、学生の意識の変化を比較するために事前と事後の調査項目は同一としている。また、参加者の意識の違いも年度ごとに比較するため、研修実施の当初から調査項目はほとんど変えていない。

- ・ 海外実地研修に何を望んで参加しようと思いますか？
（海外実地研修に参加することによって、どのような成果が得られましたか？）
- ・ タイ、カンボジア、日本というそれぞれの国に対する印象を述べてください。
- ・ 日本および世界の食料・農業問題についてどう思いますか？
- ・ 農学を勉強する意味について自分の考え方を書いてください。
- ・ 自分の進路や将来やりたい仕事についてどう考えていますか？

4.3 二カ国（タイ、カンボジア）同時訪問

海外実地研修の訪問国としてカンボジアを当初から設定し、平成22年度からはタイを加えた。研修の日数、スケジュール、参加者数などの点から、カンボジアを訪問するグループとタイを訪問するグループに分けることも検討されてきた。しかし現時点では、東南アジアの農業先進国であるタイと発展途上段階にあるカンボジアという対照的な両国を同時に訪問することにより、その違いも学ぶ機会が得られることをメリットと捉えて両国での研修を実施している。今後は、大学院での研修の候補地として、両国に加えてフィリピン、ベトナム、バングラデシュ等も検討されることから、学部での研修地も再度検討がなされるかもしれない。

4.4 ティーチングアシスタント（大学院生）

海外実地研修」と「海外学生受入研修」にTAとして参加する大学院生には、学部3年次あるいは4年次に「海外実地研修」に参加した経験を有することを採用の条件としている。現地での実習経験がTAとして教育面と運営面の補助業務に有効であることに加え、大学院生が自身の2回目あるいは3回目の研修として捉え、参加してほしいとの意図を持っている。

4.5 教員 FD

農学部の海外実地研修には、現在運営のコアとなっている教員数名に加えて毎年新規の教員と職員の参加を促している。これら教職員の参加は、単に学生の引率に留まらず、自身の FD と SD の意味も合わせ持つ。自身がタイとカンボジアの実情を目の当たりにし、研修期間中の学生の意識の変化をつぶさに体感する教職員研修の機会であると位置づけている。

研修を今後とも継続して実施していくためには、次期研修の運営を担う次世代教員の育成が必須である。その教員には、途上国のフィールドにおける学生指導のノウハウを修得し、途上国における農業指導の実際を体得してもらうことも必要であろう。また、研修の意義が学内外に広く理解され、研修が支援される体制作りが不可欠である。1 回だけの参加であっても参加教職員が増えることにより、支援体制が徐々に整いつつある。実際に「海外学生受入研修」の担当教員の多数は「海外実地研修」を経験した教員であり、参加職員を中心に両研修の事務的支援がなされている。

4.6 テーマ別研修

研修の回を重ねるごとに参加学生数が増加し、訪問する村も 1ヶ所での対応が困難となったことから、予めテーマを設定し、テーマ別にグループを編成するようになった。25 年度の場合、日本、タイ、カンボジアでの研修を通して同一テーマを設定し、5 テーマ（コメ生産、園芸、畜産、食品加工、灌漑・水管理）10 グループの編成とした。参加学生が小編成のグループワークを行い、主体的学習ができたこと、同一テーマの元で 3 カ国の様子を比較できたことはメリットであった。一方で、テーマ対象以外の農村の実情には関心を示さない傾向が見受けられた。例えば、カンボジアの農家は稲作を中心に畑作も行い、ウシ、ブタ、ニワトリを飼うことが普通であり、そこに農家の生活があるが、ブタの飼育をテーマとした学生はそれ以外のことは調査も観察も行わず、農家の実情を見ていないようであった。また、訪問先の設定に際しても、各テーマを特徴付けるためにテーマに即した農家・農村を恣意的に選択した面もあり、典型的な農村を訪問する機会を逸した可能性もある。当初の目的は、各国の農業事情をありのままに知り、包括的に受け止めるということであったはずであり、テーマ別研修を全面的に実施することはデメリットと成りうることを今回の研修は示した。

今後は 3 年生対象の研修を導入型として位置づけ、その実施体制を再度

見直すと同時に、大学院の科目として、博士前期課程（修士課程）あるいは後期課程学生を対象とした研修を新たに設定する予定である。大学院での研修では、研修期間、実施時期、人数、テーマなど参加者に応じてより柔軟に設定することが可能であり、学部とは異なった発展型研修ないしインターンシップ研修を想定している。

5. 今後の検討課題

5.1 持続的実施体制

本研修では、農学分野において国際的視野を持つ人材を積極的に育成することを目的として、日本と東南アジアの学生が自国と相手国で学ぶ双方向の交換プログラムの実施を目指している。そのためには、持続的な実施体制の構築が必要であり、上記の検討課題に加えて、以下の事項も継続して検討する必要がある。

- ① それぞれの大学の教職員に対し、プログラムに対する積極的な参加を促すこと
- ② 参加教職員がプログラムの教育的意義と成果を実感すること
- ③ 参加教職員の研究交流を基盤として持続的に意見交換できる人的ネットワークを構築すること
- ④ プログラムに対する共通理解を大学間で持ち、持続性のある研修基盤を整備すると同時に長期的に関わる教職員を育成すること
- ⑤ 教職員や学生の参加を含む研修の財政的基盤を保証すること
- ⑥ 相手国に海外拠点を構築し、研究・教育の基盤を整備すること

研修に対する理解は学内外に徐々に広まりつつあり、学生を主体としたグループワークが実施形態として望ましいとの共通理解が各国教職員間で得られつつある。また、本研修の教育効果を検証するため、学生の意識調査や追跡調査を継続して行っていく必要性も確認している。今後はさらにきめ細かな運営プロセスが必要とされるが、両研修に参加した各国教職員が主体となって長期的な実施体制が定まりつつある。

5.2 学部3年次を対象とした研修の在り方

海外での体験型研修を通して学習のモチベーションを得るためには、大学入学後、できるだけ早い時期に行うことが望ましいとの意見がある。ただし、農学部などの自然科学系学部にあっては、研修時の聞き取り調査や

観察を行う際に、ある程度の専門的知識を必要としており、研修の対象を3年次と設定した。

研修を実施する際に研修の効果を挙げるためには、特に現地調査で教員・スタッフ・TAの学生への接し方が課題となる。学生自身が主体となって研修を進めることを主眼とした場合、教員は極力学生のグループ活動に介入・口出しをせず、同行しても一定距離を置いて接することが求められる。現地での農家からの情報収集や異国の学生との間のコミュニケーションの過程で、学生自身がもどかしく思い、悩むことを体験する。そこで学生が得た情報は不正確であり、理解は不十分であり、時には誤解もある。しかし、教員の助けを借りずに、自らが主体的に考え、体得すること自体が研修の成果であり、正確な知識の取得に勝るとする考えがある。一方で、学部3年生の専門的知識はまだ不十分であり、現場にあっても教員は適切な説明を行い、聞き取り調査で得られた事項の確認と修正を行うべきであるとする考えがある。いずれが望ましいかは、教員個人の教育観や専門分野の背景の違いがあり、一概に是非を決めることはできない。ただし、実際の研修を行う際に、相手国の教員を含めた教員間でこの点について事前に十分に意思疎通を図り、意思統一をしておかないと、現地での実施形態にグループ間で差異が生じ、学生が混乱することになる。著者自身は、学部3年生の研修は、課題を発見するための導入的体験であり、学生の主体的な体験を優先するべきであると考えている。学部での研修を受けて、大学院での発展的研修を設けることで、より正確な科学的調査・観察と考察を行う機会を与えることは可能であろう。

5.3 研修の教育効果の検証

毎年の参加学生の言動やアンケートから、研修前後の学生の意識の変化、自身の進路の見直し、就職先の選択、人生観など、20歳という多感な時期の研修が学生の人生そのものに多大な影響を与えていることが伺える(表4)。しかし、研修の教育的効果について客観性を持った評価・検証がなされているかといえば、それは不十分である。事前・事後アンケートの記載事項の解析、参加学生個人々の進路決定や就職先について学生の意識調査や追跡調査(意見聴取やアンケートの実施、記録整備)を継続して行っていく必要がある。

さらに、研修の成果を学内外に周知する機会を増やし、理解を広める努力も必要であろう。

表 4 2011 年度 3 年生事後アンケートからの抜粋

研修に行く前、私は「タイやカンボジアは日本に比べ農業の機械化が進んでいなく、食料の衛生面も悪い。私たちのほうが恵まれている。」と、心の底で思っていました。実際タイ・カンボジア行ってみても、機械化はされていない、食料も衛生的にいいとは言えない、そんな状況でした。しかし、人はいつも笑顔で、いきなり訪ねてきた見ず知らずの私たちにとっても親切にしてくれました。どの農家に行っても笑顔があふれていて、私は今までの考えが間違っていたことに気づきました。人が幸せになるためには、物質的なことは関係ありません。今、世界の発展途上国で起こっている問題を解決するために大事なことは、農家の人の生活をすべて変えて、先進国のようにすることではなく、今の生活を大事にしつつ、彼らが困っていることを手助けすることです。世界の農業問題を解決するには、どんどん先進国の技術を伝えるべきだと考えていましたが、今回の実習で変わりました。彼らの幸せを保ちつつ、私たちがサポートすることが大事ななだと思います。

タイとカンボジアの現状を見て、10 年先、100 年先でもいいので、どんなに狭い範囲でもいいので、本当に社会の役に立つものを見つけるのが農学の意味だと思った。

6. おわりに

「グローバル人材」とはどのような人材を指すのか。自国について知ると同時に他国を理解し、自分の意見を持つとともに多様な意見と価値観を尊重し、地球規模の視野とマインドを持った人材と捉えている。

このような人材育成を目指して、当初カンボジアを対象に細々と開始した「海外実地研修」が、6年を経過した現在、タイ・カンボジアとの双方向の学生交換プログラムとして、3カ国 90人の学生が参加する「海外実地研修」「海外学生受入研修」となって実施されている。改善の余地は多分にあるが、ここまで積み上げてきた研修の実績は、この間の関係教職員諸氏の努力に負うところが大きい。それにも増して、TAの熱意と参加学生の意欲が研修を意義あるものとして発展させてくれたと思っている。

研究科・学部組織全体にも研修の意義についての理解が広まりつつあり、さらに名古屋大学にも濱口総長にカンボジアの現地研修を視察頂くなど、グローバル人材育成の実践例としてご理解を賜っている。

名古屋大学からは「海外学生受入研修」実施期間中の学生宿舎の無償提供、タイ・カンボジアからの引率教員の旅費支給、農学部からは「海外学生受入研修」時の移動交通費等々の財政的支援が得られている。また、日本学生支援機構からは参加学生（「海外実地研修」参加の日本人学生および「海外学生受入研修」参加のタイ・カンボジア人学生）への奨学金支援が成されている。この場を借りてお礼申し上げる。